



ひらほく新聞

ひらほくで検索！
★ホームページ ひらほくらんど★
http://www.hirahoku.com/
★ブログ ひらほく通信★
http://ameblo.jp/hirahoku/

発行所 読売センター平塚北部 (ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

大震災 復興へ 3年 当時の思いを いっまでも

住民救った 天使の声

「高台に避難してください」

「天津波警報が発令されました。」

「高台に避難してください」

「高台に避難してください」

「高台に避難してください」

3月11日午後2時46分、宮城県南三陸町の防災対策庁舎2階にある危機管理課。町職員遠藤未希さん(24)は放送室に駆け込み、防災無線のマイクを握った。

「6メートルの津波が予想されます」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

東日本大震災発生から3年。これまで復興へ向け、被災した地域の方々のために様々な救援・支援活動が、全国的に展開されてきました。その一方で、被災地以外の地域では、震災の記憶自体が薄れつつあることも指摘されています。被災地域が、本来の機能を取り戻し、そこに暮らす皆さんが安心して生活が出来るようになるまでには、まだまだ長い道のりが必要です。

志津川高を卒業後、仙台市内の介護専門学校に入学。介護の仕事を目指したが、地元での就職を望む両親の思いをくみ、町役場に就職した。同僚は「明るい性格。仕事は手際よくこなしていた」と言う。

2010年7月17日、専門学校で知り合った男性(24)と、町役場に婚姻届を出した。職場仲間にも祝福され、2人は笑顔で記念写真に納まった。

両親は当初、2人姉妹の長女が嫁ぐことに反対だった。

「どうしてもこの人と結婚したい。」

男性が婿養子になると申し出て、ようやく両親も折れた。今年9月10日には、宮城県松島町のホテルで結婚式を挙げる予定だった。

美恵子さんは「素直で我慢強い未希が人生で唯一、反抗したのが結婚の時。それだけ、良い相手と巡り合えたのは幸せだったと思う」と語る。

遠藤さんの声は、住民の記憶に刻まれている。山内猛行さん(73)は防災無線を聞き、急いで高台に逃げた。

2011年4月12日付 河北新報

日本に自衛隊がいてよかった (産経新聞出版)

「自分が行きます！」

福島第一原発に放水をするため、陸上自衛隊のヘリコプター「CH-47」が出動することになった時のことだ。

「今、無理しなくてどうする」「被爆覚悟の作戦にもかかわらず、そんな声があちこちから聞こえてくる。」

3歳の男の子の遺体を発見した時のことだ。母親が探していたのを知っていたので、連絡して確認してもらおうことにした。変わり果てた姿だったが、母親は服装がわが子と分かったようだった。どうしても最後に抱っこをしたという。

「収納袋のままでした。お母さんはその子を抱きしめるとよかったですね。」

自衛隊さんたちが助けてくれたよ。お前も今度生まれ変わって、大きくなったら自衛隊に入れてもらおうね」と泣いていました。隊員達は手を合わせ線香をたいて見送った。

「無理だと誰もが思っても、むなししい時間だと知っていても、人々は毎日、同じ場所に来て行方不明の家族を探す。その側で懸命に活動する自衛隊の姿が、どんなに支えになっていくだろうか。」

「俺、自衛隊に入る」

ボツリと小学生が言った。なぜ？と聞くと、次のようなことだった。津波にのまれた父親が帰ってくるのではないかと毎日、ずっと海を見つめていたところ、若い自衛隊員に声を掛けられた。そこに佇む理由を話すと、その自衛隊員は何も言わずに肩に手を置いて、しばらくの間、一緒に海を見つめたのだという。

気仙沼市立階上(はしかみ)中学校の卒業式における卒業生代表 梶原裕太君の答辞

本日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙げていただき、ありがとうございます。ちょうど10日前の三月十二日。春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通い慣れたこの学舎を、五十七名揃って巣立つはずでした。

前日の十一日。一足早く渡された思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らずに...

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はいくらでも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていかれました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。

時計の針は十四時四十六分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。

命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。

私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

先輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものか考え、いとおしんで過ごしてください。先生方、親身のご指導、ありがとうございます。先生方が、いかに私たちを思ってくださっていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございます。これからもよろしくお願ひいたします。

お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩んでいく姿を見守ってください。必ず、よき社会人になります。私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。最後に、本当に、ありがとうございます。

平成二十三年三月二十二日 卒業生代表 梶原 裕太

東日本大震災の年、義援金、世界の... 日本精神の美徳が今も息づいていることを、先人の生き方を、日本人の生き方を、日本人の心で刻まれるだろう。

現代史 日本人の知らない日本がある。白駒の歴史。白駒の歴史。白駒の歴史...